

施設のミッションに基づく  
共感と創造、つながりの可能性に満ちた参加型事業

## 「みんなのディスコ」の取組

可児市文化創造センター ala（公益財団法人可児市文化芸術振興財団）

澤村 潤

公益財団法人可児市文化芸術振興財団 事業制作課 係長

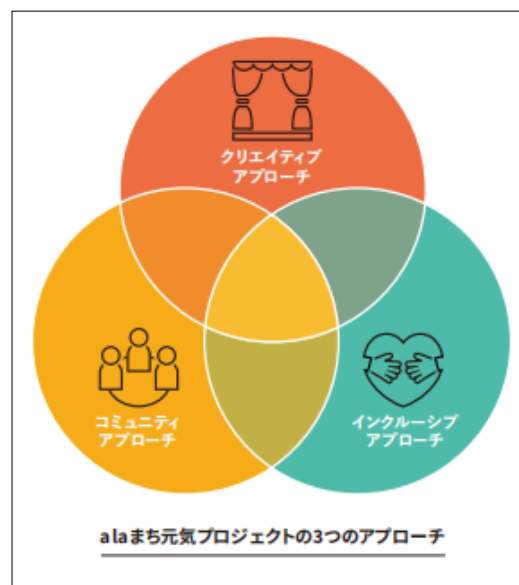
半田 将仁

公益財団法人可児市文化芸術振興財団 事業制作課

楽しさ、共感、新たな出会い等を創造する参加型ダンスイベント「みんなのディスコ」、誰もが安心して自由にクラシック鑑賞体験ができる「オープンシアターコンサート」とともに、障がい、国籍、年齢、性別、全ての違いを受け入れて音楽でつながる場として、毎年1回開催されている。目的は、障がいのある方も健常者も多様な参加者の交流と共感を育むことで、違いを豊かさを感じる場を創り、共生社会の実現に寄与すること。いずれも、「つながりを醸成する＜社会包摂型劇場経営＞」を推進し、文化芸術で生きる活力とコミュニティを創出して＜誰ひとり孤立させない社会＞を目指すという、施設のミッションに則して実施している。

### ●事業を始めたきっかけ

当館では「誰ひとり取りこぼさない共生社会の実現」というミッションを掲げ、それを実現するための3本の矢として「クリエイティブアプローチ：感動と生きる希望を生み出す最高水準の舞台芸術の創造発信」「コミュニティアプローチ：人と人をつなげていく市民総活躍社会の実現」「インクルーシブアプローチ：生き辛さを解消する文化芸術によるセーフティーネット」を設定している。その一つとして、障がい者に音楽鑑賞体験を提供する「オープンシアターコンサート」を実施してきたが、障がい者施設へのアウトリーチ事業の際、障がいのある方々は社会で健常者と交流する機会や、公の場で芸術を楽しむ機会が少ないと聞き、鑑賞だけではなく参加型の芸術を体験する機会も必要だと思っていた。在外研修で社会包摂運営を実践しているイギリスの劇場「リーズプレイハウス」に行き、そこで障がいのある方を対象としたディスコの事業を体験した。参加者が非常にいきいきしており、劇場側もやりがいを感じ、とてもハッピーな空間となっていることを肌で感じた。日本でも同様の事業が実施できるのではと思い、試しに実施したところ、反響が大きく、その後は毎年実施している。



まち元気プロジェクトの3つのアプローチ

### ●事業の目的と意義

公共ホールで障がいのある方々に楽しんでいただく参加型の場と、鑑賞の場を提供する。障がいのある方々がそこで自分の心を開いてそのまま表現することで、自信や自己肯定感を高めると同時に、健常者も障がいのある方々と一緒に踊ることで、障がいのある方への理解を深め、新しい気づきを得ることができる。そのような共生社会の実現に寄与できるミッションに即した事業と位置づけている。

## ●事業の変遷

・1回目は毎年行っているエイブルアート展の関連企画として実施した。実際に障がいのある方々が来てくれるか不安があり、市内の福祉関係施設などにイベントの説明をして回った。福祉施設職員の方が興味をもってください、引率者を含めて100名ほどが集まり、非常によい空間となった。DJやショータイムで踊るダンサーらは、地元のダンス講師に紹介していただいた。イベント終了後、ダンス講師は障がいのある方々と共に楽しむこと自体が刺激的だったようで、「私たちはうまく踊ろうとするが、障がいのある方々の踊りを見て、音楽はこう楽しむべきなのだ気づいた」と話してくれた。1回目の成功体験が大きな土台となっている。

・障がいのある方を対象としていたが、健常者にとっても意味があることが見出された。令和5年度はドラッグクイーンを招き、障がいの有無だけでなく、ジェンダーも含めて違いを豊かさへ変換するという方向に、事業目的のウェイトを少し変化させた。

## ●事業の工夫

### 【連携と意義の共有】

・公募サポーター（約20名で組織。障がい者施設の職員も参加）と協働して実施している。サポーターや出演者など、関わっていただく方には、事業の意義の共有を重視し、レクチャーや打ち合わせなどで目的や趣旨を理解いただくようにしている。毎回、イベント実施前に、近隣の障がい者施設の職員に、障がいのある方に対する距離感やコミュニケーションのとり方についてレクチャーをしていただいている。

### 【企画の工夫】

・クリスマス、ハロウィン、七夕など、開催時期にあったテーマを設けている。アイデア出しもサポーターミーティングで行う。企画段階で市民に入ってもらふことにより、市民のニーズを反映させている。

・そもそも日本では自由に踊るという体験が少なく、第1回ではオープニングに踊りのレクチャーを行い、「踊ること」に対するハードルを下げるようにした。

・疲れすぎないように、ゲストパフォーマーのパフォーマンスや障がい者施設の方々の発表の場、ファッションショーなどを行うショータイムを設け、座って休憩できるインターバルをつくっている。

### 【安全に対する配慮】

・事故が起きないように、飾り付けは技術スタッフも立ち会って安全性に配慮しているほか、入口で人数制限を行う、フロアにサポーターを数人配置し、危険がないよう見守るなどの対応をしている。障がいのある方は激しく動く場合があり、ある程度のスペースを確保するために人数制限は重要である。また、障がい特性により特に配慮や注意の必要な方は、事前に施設職員に教えていただき、その情報もサポーターと共有して目配りしている。

## ●参加者、関係者の反応

・参加者の保護者からは「普段とは違う一面が見られた」と聞くことが多い。特にコロナ禍では自己表現の機会が限定されていたこともあり、楽しそうな表情で踊る姿は新鮮に映るようだ。

・ドラッグクイーンからは、「障がいのある方と近い距離で心から楽しく踊る機会はないので、よい意味で衝撃的だった」という感想が聞かれた。DJも「イベントに関わらせていただいたことに感謝している」、



2023年の様子



ドラッグクイーンのショータイム

「もっとこういうイベントができればいい」と言っている。関わってくださるアーティストや地元の方々も、イベントへの理解を深めながら、イベント自体を楽しんでいる。

### ●事業担当者の感想と施設の変化

- ・障がい者と健常者の理解を深める場づくりとして成功しており、さまざまな可能性があると感じる。そのような場づくりは地元の人々が主体となることが大切であり、参加してくださるボランティアの方々が財産である。今後新しい展開をしていく上では、その方々との協働が大切になるだろう。地元の人たちと場づくりを進め、今後はその人たちが主体的に担ってってくれるヴィジョンを描いている。
- ・通常の鑑賞事業と異なり手間のかかる事業であり、安全面など技術職員の協力も通常より必要になる。参加者が喜び、会場が盛り上がる様子を見て、技術職員から「やってよかった」と聞くなど、職場のチームワークを円滑にするきっかけにもなっている。
- ・低コストでもあり、多くの劇場で実施が可能な事業と感じている。他の施設へも広げていきたい。希望があればノウハウ等をお伝えしたい。

### ●設置自治体の評価

平成24年の劇場法制定後、市と協議しながら劇場法に基づいた「可児市文化創造センター条例」を改正し、社会包摂の概念を盛り込んだ経緯もあり、市は当館の事業に対して非常に理解してくださっている。

### ●事業価値

障がい者と健常者の理解を深める場づくりとして機能し、障がいの有無を問わず、参加アーティストも含めて、「共感」の生まれる場となっている。市民による実行委員とともに音楽を通じて共感と創造につながる場をつくっていること、それを継続してきたことも重要である。理解してくれるアーティストを増やし、サポーターのやりがいを高めていくことにより、さらに新たな活動を生み出す可能性のある場、多くの人々がゆるくつながっていく場となり得ると思う。

### ●事業の課題と今後

活動の認知が広がるほど来場者が増える一方で、安全面などから制限が必要になるというジレンマがある。あまり安全性を優先しすぎると、硬いものになりがちなので、安全性を担保しながらいかに参加しやすい場をつくるか、その両立を試行錯誤している。よりよい運営方法を考えていきたい。

共生社会実現のためのコミュニティをつくるには、実施回数を増やす、障がいのある方以外の入場者の割合を増やすなどしていく必要もあると感じている。一般の方にこのイベントの認知を広め、障がい者と健常者の垣根をとる共生の方向に少しシフトしてもよいかと思う。また、ジェンダーや外国籍の方なども含めた企画も検討していきたい。

### ●その他の事業：オープンシアターコンサート

障がいのある方だけでなく、乳幼児など普段劇場に足を運ぶことが難しい方でも安心して楽しめる、誰にでもオープンなクラシックコンサート。平成27年から毎年1回実施している鑑賞事業で、毎回約300人が来場する。恒例イベントとして定着し、障がい者施設も事前に参加の予定を組んでくれている。車椅子



オープンシアターコンサート



のびのびシートの様子

エリアや、自由な姿勢で鑑賞できる栈敷席（のびのびシート）を用意している。当日は職員8人とNPO法人alaクルーズ10～12人で対応し、車椅子用の動線も確保して誘導している。継続して実施することに意味があると思うので、続けていきたい。このコンサートの他に室内楽を小規模な会場で行うなど回数を増やしていけたらと考えている。また、鑑賞機会の増加という意味では、施設のミニシアターも効果的に使うことも検討したい。

### 【「みんなのディスコ」事業データ】

開始・実施回数	年1回開催
入場料	現在は無料。ワンコイン（400～500円）で設定したこともあるが、その場合は障がい者施設に特別招待券を配布した
補助金	独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業）
参加者の状況	メイン会場には毎回100名程度が参加。知的障がいの方の参加が多い
広報	当初はオープンシアターコンサートの案内を送っていた近隣施設を周って直接事業案内を行い、利用者へのチラシ配布を依頼していた。現在は福祉関連施設などにチラシを郵送
他機関との連携	（令和5年度）可児地区更生保護女性の会、ごちゃまぜアートの会（展示協力）、岐阜大学、障害者支援施設 可茂学園、TONBO（ダンス講師）

### 可児市文化創造センター ala

所在地：〒509-0203 岐阜県可児市下恵土 3433-139  
TEL：0574-60-3311

設置者：可児市

開館：2002年

管理者：公益財団法人可児市文化芸術振興財団

規模：主劇場（1,019席）／小劇場（311席）

**施設の特徴**：「芸術の殿堂」ではなく、人々の思い出が詰まった「人間の家」として、「つながりを醸成する社会包摂型劇場経営」を推進。文化芸術を愛好する人たちだけでなく、あらゆる層の市民が生きがいをもち、安心して集うことができるもう一つの我が家のような存在として、文化芸術で生きる活力とコミュニティを創出し、＜誰ひとり孤立させない社会＞を目指している。

ホームページ：<https://www.kpac.or.jp/>



可児市文化創造センターala 外観

※写真はすべて可児市文化創造センター提供